

《きい……ぱたん》

（扉を閉める音）

不愉快なやり取りを終え。そ知らぬ顔をして少女の待つ家へと戻る貴方。

ノラ

「……っ！ おっさん！！」

《たたたたた》

（駆け寄る音）

家に帰ると、顔を見た瞬間、ノラが弾けるように駆け寄ってくる。

貴方はその様子に、心配させないよう笑みを浮かべ、

【大した事はなかった、話をしてみたら意外と話が分かる相手だったよ。娼館の事はもう心配しなくていい、お前はもう自由だそうだ。

あと、親父さんにも会ってきたが……やっぱりまだ色々難しい様子でな。暫くは会わない方が良さそうだった……こっちは解決出来なくて悪かったな】

と、安心させるように、なんて事のない簡単な事だったと思って貰いたくて、申し訳なさそうにしつつも明るく声をかける。

だがノラはそれを聞くと俯き、その肩を小さく震わせた。

ノラ

「……なんで、嘘つくんだよ」

肩の震えがそのまま声に伝わったかのように、ノラの言葉が揺れていた。

どうして嘘などと言われるのか分からず驚き、

【本当に解決したんだぞ？　嘘じゃない、もう安心していいんだ】

と貴方が告げると、少女は勢いよく顔を上げ怒ったように眉を吊り上げながら、貴方を睨んだ。

ノラ

「嘘だっ！！　うそつきっ！！」

オレが何も知らないとも思ってるのかよ！？　一度娼館に売られた娘を、店がそんな簡単に手放す訳ないじゃないか！！

それに、それにオレ……あんたが！　おっさんが心配で外に出て……教えて、貰ったんだからな！？

……すげえ額の金積んで、オレの事……買い戻してくれたって！

その金、どうしたんだよ？　……おっさん、冒険の装備を整えるのに金貯めてたそうじゃないか！

なのに、そんな事に使う金の余裕なんて、ある訳ないだろ！？　な

あ！！！？？」

少女の叫びが貴方に刺さる。

【なんでそれを？　一体誰が？】

少女には知らせぬようにしていたはずの話であつたために、貴方は驚き、思わず呟いてしまう。

ノラ

「やっぱり……そうだったんじゃないか。

外に出た時、前に……おっさんに抱き付いてた娼婦の、あの女がさ。

オレに教えてくれたんだ、『随分と愛されてるのね?』なんて言いながら。

……なあ、おっさんやっぱり、その貯めてた金つてのを?」

少女の言葉に、貴方は思わず呻く。

余計な重荷を感じて欲しくなかったからこそ、大した事ではなかったと済まそうと思っていたのだが、その予定が外されてしまったのだ。

貴方は脳裏に浮かぶ馴染みである娼婦の顔を恨めしく思いながら、こうなつては誤魔化せないと、大きくため息をつき、少女の言葉に頷いた。

ノラ

「……やっぱり、そうだったのかよ。

なんで……なんでそんな余計な事したんだよ!!

その金、あんたの……おっさんの大事な金だったろ!?

あんたの金をスろうとして、更には勝手に住み着いたようなクソガキに出していい金じゃないだろうが!」

少女が、更に声を張り上げる。

何度も、どうしてだ、なんでだと、繰り返し問い詰めるように叫び続ける。

その声に貴方は気まずげに顔を逸らし、黙った。

少女を哀れに思った、あんな下種な男がのさばるのが気に食わなかった。

他にも幾つもの理由が頭の中に浮かんではいる。

けれど、一番大きな理由はと聞かれてしまえば……その理由は酷く利己的なもので、それなりに人生を生きてきた身で言うには、正直……気恥ずかしいものであったからだ。

ノラ

「……………」

少女が無言で貴方を睨む。

言わねば、絶対に許さないと思っっているだろう事が、その顔からは伺えた。

それは自分一人で生きていくしかないのだと、そんな悲しい覚悟を決めていた少女にとっては、余りに唐突で理解出来ない行為であったからなのだろう。

何もしていないのにそんな返しきれぬ恩を受け取らされるというのが、理解できないからこそどう気持ちを向ければいいのか分からず、困惑に、恐怖すら……感じているのかもしれない。

ノラの無言の圧力に、言わねばかえって彼女を傷付けてしまうと悟った貴方は、また一つ、大きく、大きく……息を吐き出した。

それはため息というよりは、自分の思いを、恥ずかしさを、吐き出すための気持ちの準備、そんな吐息であったのかもしれない。

自分のエゴを露に、正直に言わねばならない気まずさに耐えながら、貴方はゆっくりと口を開く。

【……一緒に居たいと思える相手が、自分を待って家にいてくれる。それが何より心地よくて嬉しかった。

それが無くなるのが、我慢出来なかったって言ったら……嗤うか？】と。

ノラ

「……え？」

小さく……本当に聞こえるかどうかという小さな声で、貴方は気持ちを吐き出した。

それは子供が言う我侭のような、自分勝手に、身勝手な、どうしようもなく利己的な思いだった。

少女が……ノラがいてくれる。その時間が、彼女がいるこの家が……何より大事だったという、そんな子供じみた思い。

それを無くしたくなかっただけだという気持ち、それこそが貴方の中の最も大きな……偽らざる思いであった。

【死ぬかもしれないと思ってモンスターと戦って、切った張ったで相手

を殺し、自分も傷付いて。

そんな憂さを晴らすように馬鹿騒ぎして、それでも何処か疲れたまま家に帰ってくるのがm日常だった……。

そんな中、お前が家にいて、飯を用意してくれていて、遅いだの怪我は大丈夫かだの、そう心配しながら『おかえり』って言ってくれる。

それが……どうしようもなく、嬉しかったんだ。

それが無くなるのは………どうしようもなく、嫌だったんだ】

一度言葉にすると、もう止まらなかった。

貴方は、聞かせるつもりじゃなかった自分の我儘でしかなかった気持ちを、少女に打ち明ける。

どう思われるか、恐れる気持ちはあったが……それでも包み隠さず、真剣に。

ノラ

「あ……え」

ノラはそんな事を言われるとは思っていなかったのか、目を丸くし、驚き戸惑いながらもただ黙って聞いていた。

【助けたいとか、見捨てられなかったなんて……綺麗な話じゃないんだ。

何処までも自分のため、自分勝手に……お前に傍にいて欲しいと思った。

お前に、この家に、このまま居て欲しいって……だからこうした。  
……馬鹿みたいだろ？ 良い大人が、みっともなくて】

自嘲するような笑みが勝手に浮かんでくるのが、貴方には分かった。  
けれど、それが一番の理由……言うつもりはなかった、本音なのである。

少女は貴方の顔を見て、何かを言おうとし……言葉にならないのか、また口を閉ざす。

【……本当に、お前はもう自由だ。

娼館の奴等に狙われる事もないし、お前の父親にも……勝手ながら近寄らないよう、念押ししてきた。

でも、お前が出て行きたいと思うなら、父親の所に戻るのも、何処かで……一人で生活を始めるのも、全て自由なんだ。……でも」

少女が何も言わないために、貴方は言葉を続ける。

どうせ、一番恥ずかしい思いはすでに言ってしまったのだ。

それならば、恥を上塗りをした所でもはや構うものなど何もなかった。

【……このまま、この家にいて欲しい。

傍にいて、今までみたいに……一緒に暮らして欲しい。

傍に、いて欲しいんだ……ダメか？】

ここまで来てしまったならばと、全ての気持ちを吐き出す貴方。

大人として少女を守るような、そんな姿を見せていたいと思っていたはずなのに。

まるで自分が子供のように、こんな年下の少女相手に年甲斐もないと思いついながらも、言わずにはいられなかった。

ノラ

「……………バカみてー、そんな事言って、恥ずかしくないのかよ、おっさん」

信じられないものを見るように、目を見開き貴方を見ていた少女が、ぽつりと小さく呟いた。

その言葉に貴方は、気恥ずかしくなつて苦笑をして、顔を逸らす。

嗤われて当然の我俣だ……それが当たり前の反応だと、そう思ったためだった。

ノラ

「バカみてー……バカみてー。

そんな、そんな自分勝手な理由で……それで、自分のために貯めてた大金使つて？

オレが、感謝とかしねーでおっさんの事嗤って、どっかいつちまうとか思わなかったのかよ？」

少女が呆れたとばかりに、皮肉気に口元を歪ませる。

貴方はまさにその通りだと、苦笑いをしたまま、



【そうなった時は……そうなった時で考えるさ】  
と、そう言うしかなかった。

ノラ

「……ふんっ、バーカ、おっさんのバーカ！  
オレに甘いだ、未熟だなんだって言っておいて、おっさんのがよっぽど  
考えなしのガキじゃねえか！

バーカ……バーカ、おっさんの……バ、カ……っ」

少女の声が、突然詰まった。

どうかしたのかと貴方が視線を戻すと、ぼろぼろと少女の目からは幾つ  
も、涙が零れ落ちていつていた。

ノラ

「それ、つまり……オレと一緒にいたいって、ことなんだろう？  
オレと一緒に、”家族みたい“に過ごすのが……楽しかったって、こと  
だろ？

なんで、出てくとか思うかなあ……！？ そんな事言われて、考えても  
らってて……あたし、出て行ける訳ないじゃないかよお……っ！！」

ぐす、ぐすと涙に声を濁らせながら、少女が怒ったように貴方に言う。

ノラ

「ばー……か！ おっさんの、ばー……か！

あたしが、この暮らし……楽しくないと思ってるだけでも、考えてたのかよ！？

……おっさんの、あんたの傍に居たくて、でもそれが迷惑になるって、そう思ったから……出て、こうと……思ってたつてのによお！」

ぽろり、ぽろりと涙が伝い、地面に落ちる。

幾つも幾つも、少女が溜め込んでいた思いの数が雫になったように、滴って（つたって）いく。

ノラ

「聞いたからな……あたしに、いて欲しいって……思ってたつて、聞いたからな！」

絶対、もう絶対出て行ってやらないから……絶対だぞ！！」

《だっ！ ……ぎゅう》

（抱きつく音）

濡れる頬をそのままに、少女はそう言って“あなた”に抱きついた。貴方の胸元に湿り気と、じんわりと暖かい彼女の体温が伝わっていく。

ノラ

「ぐす……おっさんのガキ！ 我俣！……自分勝手！」

もう、放さないで、くれるんだよな？ おっさんは……一緒に、いてくれるんだよな？」

貴方の胸に顔を押し当てながら、少女が問いかける。

胸に広がっていくその温かみを感じながら貴方は、少女を抱きしめ返す。

——当たり前だと、そう返事をするために。

ノラ

「……っ！ ……ばーか。

ったく、抱きしめる力が強すぎんだよ、おっさん……。

へへ、それぐらい強くあたしの事、放さないようにしてくれないと……  
承知しねえからな？」

涙に混じった声に、むず痒そうな、嬉しそうな声が混ざり……彼女が、  
笑みを浮かべたのが貴方には見ずとも分かった。

貴方はそれに応えようと、ぎゅつと……彼女をより一層強く、抱きしめ返すのであった。

《ぎゅう……》

（再び、抱きしめる音）